The Four Georges における国王と社会

Kings and Societies in *the Four Georges*

鈴　木　幸　子

W. M. Thackeray の講演集，*The Four Georges* は，最初に米国で（1855—1856），そして引続き英国で講演されたものである。この講演ほど当時のジャーナリズム，および多くの人々から酷評を受けたものはなかった。[1] しかしこれが書物に印刷され，出版されて以来，Saintsbury などによって，[2] その文学的価値が，いくらか認められ始めた。近年では G. N. Ray によって，文学的であると共に，作者の政治的見解を表わすものと見なされている。[3] 筆者はこれらの意見をふまえた上で，この講演集がサッカレイの歴史解釈にもとづく文学表現であるという内容と形式に注目し，この講演集にたいする作者の意図は何であるかを考えてみたい。

The Four Gerges は，作者がさりげなく語る談話，という表面上の形をとっている。この点について，作者は George 一世を語る序文で，

... to amuse a few hours with talk about the old society ... (XI 6)[4]

と述べている。この言葉は，昔の社会について語るという作者の意図が示されていると同時に，聴衆に一種の寛ぎを与えるための言葉であり，この講演全体の内容を指すものではない，と筆者は思う。何故ならば，一見，雑然と語られる四人の George 王たちと彼等を取巻く社会の話が，実際はこの上なく統一され，一つの主題が繰返され，強調されてこの講演の目的を達成するという意図のもとに語られているからである。その目的とは，王と社会の相互関係に視点をあて，解釈すること，即ち，一種のサッカレー的な歴史を書くことである。そこで George 一世から Geoge 四世に至るまで，王たちについて作者が語る事柄を辿り，これを見討してみよう。

George 一世の講演では，彼の出身地ハノーヴァ宮廷について，克明に物語られる。それは十七世紀頃からのハノーヴァ宮殿内での諸行事および日常生活のリポートであり，また，宮廷内に仕える者の員数および給与の明細書のようでもある。作者がこのような宮廷内の細かな事柄を述べている理由として，庶民が王室内の具体的事実に興味を持っているがため，これを満足させる，という作者の意図があるという点も考慮されなくてはならない。しかし，一方では，

George 一世を語るにあたって，作者は，王の社会的背景を述べることが必要であると考えていたのである。すなわち，ハノーヴァ宮は George 王の終生変らぬ生活を形成したのであった。王は閉鎖的ではあるがフランス宮廷風に染まった，きらびやかで庶民の生活から隔離されたハノーヴァの王宮から二人の 'ugly noble women' および 'German chamberlains, secretaries' (XI23)など，ささやかな数の従者を引き連れて英国にやって来る。彼は'prudent, quiet and selfish' (XI 13) な君主であった。彼が感情を外に表わす時は，彼の故郷，ハノーヴァについて語る場合に限られていた。英国については，彼は 'uncommon coolness' (XI 14) の態度を持し，自分を 'only a lodger' (XI 14) と考えていた。この王の心の中は，次のような彼のモノロオグで示されている。

> "Loyalty," he must think, "as applied to me—it is absurd! There are fifty nearer heirs to the throne than I am. I am but an accident, and you fine Whig gentlemen take me for your own sake, not for mine. You Tories hate me; you archbishop, smirking on your knees, and prating about Heaven, you know I don't care fig for your Thirty-nine Articles, and can't understand a word of your stupid sermons. You, my Lords Bolingbroke and Oxford—you know you were conspiring against me a month ago; and you, my Lord Duke of Marlborough—you would sell me or any man else, if you found your advantage in it. Let us make the best of our situation; let us take what we can get, and leave these bawling, brawling, lying English to shout, and fight, and cheat, in their own way!" (XI 24)

ここには，「ただ待っているだけで英国王となった」George 一世の孤独感と疑心に悩む一人間としての彼の姿や，彼をめぐる当時の政治家たち——それは Tory であろうと Whig であろうと——の醜いエゴイズムが実在感を伴って浮び上って来る。

George 二世を物語るについても，同じく王の個人的な面からの考察がなされている。

> a choleric little sovereign . . . he speedily and shrewdly reconciled himself with the bold minister, whom he had hated during his father's life, and by whom he was served during fifteen years of hit own with admirable prudence, fidelity, and success. (XI 36)

したがってここに描かれる王も英雄的に物語られることはない。ここに登場するのは，十五年間，自分が憎んでいる大臣たちと，抜け目なく和解して過さねばならなかった惨めな王の姿である。この王については，彼の不幸な家庭生活が語られる。そして，更に最愛の妻に先立たれた後の晩年の王の姿を，仮装舞踏会で元気にダンスのステップを踏む 60 才の 'dapper little George' (XI 57) として戯画的に示すことにより，サッカレイの一個人としての王の紹介は

完璧になる。

George 三世については，同情心を与えるような物語り方法がとられ，この部分は聴衆の王に対する哀れをそそった唯一の講演であった。(XI xlv) そして王の私的生活にサッカレイの視点が定められていることは前述の二人の王と同じである。この王は，信仰心深く，質素で規律正しい生活を送り，民衆から 'farmer George' (XI83) の愛称をうけたほどであった。彼の家庭は，'domestic virtue' (XI 82) そのものであった。その結果，彼の王子たちは，すべて家出をしてしまうほどであった……と作者は述べる。(サッカレイは如何に同情的に描いても，このようなアイロニイを忘れない。) また，George 三世は 'the etiquettes of his own and his grand-father's Courts' (XI 78, 79) をよく守った。しかし，

> 'to control the thoughts, to direct the faith, to order obedience of brother millions' (XI 79)

という王者として持つべき能力には欠けていた。彼の晩年は，

> ... the old man, blind and deprived of reason, wandering through the rooms of his palace, addressing imaginary parliaments, reviewing fancied troops, holding ghostly Courts. (XI 88)

と物語られている所では，狂気になっても自己の執念を失わない人間性の一部が具体的表現によって伝えられる。同じく次のようなこの王のエピソードでは，彼の理性が僅かに残っている時のみ，彼の粗野な品性が示される，という不気味な王の一面と，人間というものの脆さがここに強調され，示されている。

> .... farces and pantomimes were his joy; and especially when clown swallowed a carrot or a string of sausages, he would laugh so outrageously that the lovely princess by his side would have to say, 'My gracious monarch, do compose yourself.' But he continued to laugh, and at the very smallest farces, as long as his poor wits were left him. (XI 77, 78)

狂人となったこの王から George 四世に至ると，実体のない外衣のように生きている人間が示される。この George 四世は生れながらに美しかった。そのため，彼の肖像画は，幼少から成人に至るまで数えきれないほど多い。しかし，この王について語るべきものは，

> 'nothing but a coat and a wig and a mask smiling below it...' (XI 94)

と述べられる。この王にも長所がなくはない，しかし，それは次のように語られる。

> He was good-natured; an indolent voluptuous prince, not unkindly. One story, the most favourable to him of all, perhaps, is that as Prince Regent he was eager to hear all that could be said in behalf of prisoners condemned to death, and anxious, if possible, to remit the capital sentence. (XI 102)

しかし，ここに長所として，示されるものも，王の人格を高めるどころか，むしろ皮肉な誉め言葉となっている。

以上，四人の国王を語る作者の態度には，共通したものがみられる。それは，どの国王であっても，弱い人間にすぎないという視点から王を語ろうと作者は試みていることである。

Saintsbury は，この講演集を評して，

> He (Thackeray) certainly puts George III's ability too low, ...[5]

と述べている。しかし作者の目は，もっぱら王の個人としての生活にそそがれ，たとえ公の王としての言動を作者が語るとしても，これを美化し，英雄的に物語ってはいないからである。これは，王を解釈する作者の姿勢から生ずる結果であると思う。それでは，何故サッカレイは王を一人の人間として観察し，これを語る立場をとったかを考えてみよう。

サッカレイは *Henry Esmond* の序章で，歴史について次のように述べている。

> I would have History familiar rather than heroic: and think that Mr. Hogarth and Mr. Fielding will give our children a much better idea of the manners of the present age in England than the Court Gazette and the newspapers which we get thence, (X 2)

即ち，作者は「歴史は偉人の伝記である。」という古い伝統の歴史観ではなく，事実尊重という19世紀の歴史家の態度をとったといえよう。そしてこの過程で，作者は個人の生活と心を描き，これを評価することによって，現在に何らかの示唆を与えたいと意図していたのである。

しかし作者は，個人としての王も亦，社会と切り離されて存在するものではないということを認識していた。彼は 'the old world' と称して四人の国王を取り巻く社会を，時代を追って庶民の社会と対照しながら語って行く。例えば，George 一世では，ハノーヴァ宮の在り方を示すものとして，王公貴族の宮殿と惨めな庶民の村とを対照して描いている。

> — near to the city, shut out by woods from the beggared country, the enormous, hideous, gilded, monstrous marble palace, where the prince is, and the Court, and the trim gardens, and huge fountains, and the forest where the ragged peasant are beating the game in (it is death to them to touch a feather) ... (XI 9)

しかもこれはハノーヴァに限られた社会の在り方ではない，それは以下のように，

> German, or French, or Spanish, if yow can see out of your palace-windows beyond the trim-cut forest vistas, misery is lying outside; hunger is stalking about the bare village ..... A grander monarch, or a more miserable starved wretch than the peasant his subject, you cannot look on. Let us bear both these types in mind, if we wish to estimate the old society properly. (XI 10)

と述べることで，ヨーロッパの旧社会に共通して見られる在り方であると作者は論ずる。このような国民の社会から孤立したハノーヴァ宮から英国王として迎えられた George 一世は，前述の彼のモノロオグに表わされているように，自己の内に篭っている間に英国社会は 'in their own way' (XI 24) に流動し，発展して行く。

国王と英国社会全体との関係をサッカレイは，次のようにアイロニカルに表現する。すなわち，George 一世の英国に対する態度は，

> 'to leave it to itself as much as possible, and to live out of it as much as he could. (XI 30)

である。しかしそのために，

> at least we may thank him for preserving and transmitting the liberties of ours. (XI 31, 32)

と作者は述べる。ここでサッカレイは，過去に於て，明かに王制が英国の発展に無用のものであったということを示し，この主題は次の George 二世で繰返し強調される。

George 二世では，作者は英国における 'a quarter of a century of peace' (XI 136) を讃え，これを Sir Walpole に負うものであると述べる。

> He gave Englishmen no conquests, but he gave them peace and ease and freedom.... (XI 36)

また宗教についても作者は王室の chaplains と 'congregation of miners at the pit's mouth' (XI 45) にとり巻かれた John Wesley を比較し，Wesley が宗教に果たす役割の方がより神聖なものであると見なしている。一方風俗描写では宮廷内の生活と市民の生活も紹介される。王宮内では自由を束縛された 'maids of honour' の苛酷な条件下の日常の務め，それに対して一般庶民の楽しい 'gregarious' (XI 48) な生活方法が比較される。

> Every town had its fair, every village its wake. The old poets have sung a hundred jolly ditties about great cudgel-playings, famous grinning through horse-collars, great maypole meetings, and morris-dances. (XI 48)

結論として，George 二世も George 一世とともに社会に果たした役割は次のようにアイロニカルな表現ではあるが，明快に述べられる。

> It was lucky for us that our first Georges were not more high-minded men; especially fortunate that they loved Hanover so much as to leave England to have her own way. Our chief troubles began when we got a King who gloried in the name of Briton, and, being born in the country, proposed to rule it. He was no more fit to govern England than his grandfather and great-grandfather, who did not try. (XI 37)

この作者の批評は，次の George 三世および George 四世の社会的意義をも予告している。

George 三世の時代は，ワットの蒸気機関の発明，アメリカの独立，フランス革命，ナポレオン戦争など国の内外に大きな社会的変動が引続いて生じた多難な時代であった。多くの政治家たちが出没し，Chatham から Pitt の時代へと移る。戦争で功績のあった海軍司令官も，Rodney から Nelson へと入り代り，そして Wellington 将軍の栄光を讃える時代になる。文学者では Johnson が死んで Scott や Byron が出現する。劇場では，Garrick がその才能を発揮する。国外では多くの国王が打ち首になり，追放されたり退位させられたり，また復位されたりしなければならなかった。サッカレイがこのように George 三世治世下における国の内外での推移を個々に指摘しているのは，次のような点を強調するためである。

> Napoleon is to be but an episode, and george III. is to be alive through all these varied changes, to accompany his people through all these revolutions of thought, government, society; to survive out of the old world into ours. (XI 62)

ここで作者が語ろうとしていることは，社会に対して何の意味もない王の存在がいかに長く継続されているかを，短期間に全ヨーロッパを震え上らせたナポレオンと比較して指摘することである。そして George 三世が英国に与えたものは何かと云えば，それは，古い社会制度を現代の社会まで温存させた，ということであった。

しかし一方，作者は，George 三世時代に存在したが，作者の時代では失われたものをあげている。それは，紳士が生活することのできる階級制度のきびしい社会であった。またこの旧社会では 'dancing,' 'Gambling.' 'drinking' に明暮れる 'idle' で 'profligate' (XI 67)

な貴族が多かった。そして，次のような Newgate でのエピソードも聞かれる時代であった。

> We can peep into Newgate, where poor Mr. Rice the forger is waiting his fate and his supper. "You need not be particular about the sauce for his fowl," says one turnkey to another; "for you know he is to be hanged in the morning." "Yes," replies the second janitor, "but the chaplain sups with him, and he is a terrible fellow for melted butter." (XI 66)

ここに登場する看守と守衛の間に然り気無く交される会話には，仕事に馴らされて冷酷になった人間—それは当時死刑囚が如何に多かったかということをも暗示している—と食事のことのみ口喧しい Chaplains の特権的な存在が批判を伴って浮び上ってくる。

以上のように示された古い社会に対する作者の批評は次のようにも述べられている。

> What could a great peer, with a great castle and park, and a great fortune, do but be splendid and idle?..... Better for him had he been a lawyer at his desk, or a clerk in his office;... a thousand times better chance for happiness, education, employment, security from temptation. .... It is to the middle class we must look for the safety of England: the working educated men, away from Lord North's bribery in the senate; the good clergy not corrupted into parasites by hopes of preferment; the tradesmen rising into manly opulence; the painters pursuing their gentle calling; the men of letters in their quiet studies: these are the men whom we love and like to read of in the last age. (XI 70, 71)

ここで述べられていることは，一つは富が貴族に与えた弊害についてであり，他の一つは，自己の仕事を正直に，そして熱心に行う人々こそ社会に貢献するものが大であるということである。サッカレイは，この善良な人々の中に，'the tradesman rising into manly opulence' をあげている。しかし作者は彼等がやがて貴族と同様に有害な富を蓄積するであろうということを予想していない。そしてまた，彼の云う 'the middle class' というものが富の蓄積によって，社会的地位が上昇した特権階級の人々を指さないで，専ら天職と考える仕事に従事する人々を意味している。この点において，作者のいう良い社会が，現代から考えるとやや表面的で曖昧な考察のもとに示されている。しかし18世紀にも良い社会が存在したという意味を作者は具体的に示すことによって，ここに述べようとしたのである。そしてこの善良な人々のささやかな酒宴が王宮での盛大な宴会に勝っていると作者は述べる。

> What is the grandest entertainment at Windsor, compared to a night at the club over its modest cups, with Percy and Langton, and Goldsmith

and poor Bozzy at the table? (XI 71)

George 四世の講演で，作者が王を取り巻く一社会を描く意図は，王の生まれつき美しい容姿と彼の環境が王を 'spoil' したという結論に達することである。George 四世は，'a lovely child' であったので，多くの人々が彼のまわりに群り，彼に諂った。この王子は人々にもてはやされるがままに，成長し，自分自身を飾りたてることに専心した。この王が，王子の時代から使用する金額は，莫大なものになって行った。この王を評してサッカレイは次のように述べる。

> If he had been a manufacturing town, or a populous rural district, or an army of five thousand men, he would not have cost more. (XI 97)

George 四世は，Burke, Fox そして Sheridan など彼の時代の有能な人物と友人になろうと試みた。しかし 'the Constitution', 'Indian Bill', 'justice to the Catholics' (XI 99) などという重大な問題を彼らと語る能力を王は授かっていなかった。したがって王は彼等と，'wine' を飲み 'dice' を語る程度の交わりを持つのみであった。そのため，これら有能な人物や，Whig の指導者たちと，王が真の友情を持つことは不可能であった。彼等はすべて王を表面上尊敬するだけであった。このような王と政治家たちとの関係では，彼らとの盟約を王が破るとしても，それは当然のことであろう。即ち，王は 'tailor' とか 'cook' とは話が出来た。しかし政治家たちと対等に話をするにはあまりに 'lazy' であり 'weak' で 'levity incurable' (XI 100) であった。以上のようにサッカレイは，王と彼の周囲の人々との関係が政治面にも反映されていることを指摘する。その他 George 四世時代の風変りな世相——過度に wine を飲用したり，turpike を破る楽しみなど——を紹介し，当時の人々の姿を示すが，最後にサッカレイの住む社会を次のように批評する。

> He is dead but thirty years, and one asks how a great society could have tolerated him? Would we bear him now? In this quarter of a century, what a silent revolution has been working! how it has separated up from old times and manners! (XI 103)

すなわち，世相も急激に変化した。人々の心も暗黙のうちに変りつつある。したがってサッカレイの時代では当然王制も否定されているはづであるが……。このように作者は彼の時代をアイロニカルに批評する。

この *Four Georges* の講演はおもに18世紀という時代相を語ることによって，王制というものが王個人にとっても，また社会にとっても決して良いことではないという結論に達した。

しかし，たんにこの結論を得ることのみを目的としてこの講演集が書かれたのではない。この講演集も半ばをすぎた頃作者は次のように述べている。

> Will men of the future have nothing better to do than to unswathe and interpret that Royal old mummy? I own I once used to think it would be good sport to pursue him, fasten on him, and pull him down. But now I am ashamed to mount and lay good dogs on, to summon a full field, and then to hunt the poor game. (XI 95)

サッカレイは結果として無能な王を裁くという自己の仕事に恥ずべきものを感じた。そこでサッカレイはむしろ四人の George 王たちが生きた時代の歴史を書こうと企てたのであった。そして作者の手がけたことは，この時代を理解し何らかの解釈を与えるために王を一個人と見なすことであった。さらにこの国王の心理分析は人間性の考察[6]といった普遍的な問題にまで高められた。

サッカレイが Georges について書こうとした試みは1845年にさかのぼる。彼は Punch 誌に王たちへの諷刺的献辞とも看される "The Georges", (*Punch*, 11 October 1845) を発表し，さらに，Punch 誌に連載された "The Book of Snobs" (1846—1847) の中で "The Snob Royal" (*Punch*, 14 Merch 1846) の題のもとで George 四世を 'Gorgius' という名前のもとに諷刺的スケッチを行っている。この小話の中にもすでに王と彼を取り巻く社会を描くことにより，一つの社会批判となるという構想が見られる。このような再度同じテーマのもとに創作しようとしたことは，この歴史に文学的表現を与えようとした作者の創作的試みと考えられよう。一方歴史について書く資料という点では G. N. Ray は次のように批評している。

> The result is not an authoritative historical work based on the careful accumulation, comparison, and evaluation of evidence, but a panorama of "social England," in which the eye rests equally on background "sketches of manners, morals, court and town life," and the figures of the Georges.[7]

しかしこの点については作者自身，この講演のはじめに，'grave historical treatises' (XI 6) ではないと断っている。それにもかかわらずこれが一種の歴史であることは次の諸点からも妥当ではないかと考えられる。サッカレイは講演の中で，資料として用いた書物をあげている。それらは Doctor Doran の *A Biography of the Wife of George* I, "the Spectator and Tatler", Gay の "Letters", Selwyn の correspondents の一人である The Earl of March の "Letters"などである。作者が Memoir や letters という資料を用いたのは Victorians の事実尊重の歴史観にもとづくものである。Victorians にとって，history は

次のような二面を持っていた。その一つは history とは 'forces' と 'events' の集成であるということ。他の一つは，history は過去に生きた偉人および一般人によって目撃されたもの，というきわめて個人的なものであった。[8] サッカレイはこの後者の方法を用いた。以上のように講演集は歴史に文学的表現を与えることでより真実に近い，より正しい解釈による歴史を書こうとした19世紀の人間である作者の試みから生まれたものである。

1. Lewis Melville, *Thackeray: A Biography*, Vol. II (The Bodley Head, 1909) p. 13.
   The Letters and Private Papers. ed. G. N. Ray. Vol. III. pp. 489-490.
2. G. Saintsbury, *A Consideration of Thackeray*. (1931; reissued by Russell & Russell, 1968) p. 207.
3. G. N. Ray, *Thackeray: The Age of Wisdom* 1847-1863. (Oxford Univ. Press, 1958) pp. 255-257.
4. Works of Thackeray. The Centenary Biographical Edition 1910-11.
5. G. Saintsbury, p. 206.
6. A. Trollope, *Thackeray*, "English Men of Letters" (1887; rpt. New York AMS, 1968) p. 155.
7. G. N. Ray, *Thackeray*, p. 253.
8. John Kleis, "The Narrative Persona in the Novels of Thackeray" (Univ. of Pennsylvania, 1966) p. 254.